2011年(平成23年)10月17日　月曜日　朝日新聞（夕刊）

評

新実徳英バイオリン作品展

鮮烈で愉悦にみちた音群

真摯な問いかけと心を和ませる遊び。二つを曲ごとに使い分けながらどちらもとことん謳歌してきたのが新実徳英という作曲家だ。「ソニトゥス　ヴィターリス」シリーズと「舞踏組曲――I Love Lucy」を演奏したバイオリン作品展は、硬軟両面をバランスよくみせた一夜（9月29日、東京・上野の東京文化会館小ホール）。

大地がきしむように粗削りの2音を繰り返しつつ、生の閃きをみせるバイオリン。冒頭からただならぬ気配で軌道のない世界へ引きずり込むのが渡辺玲子の神業だ。ごりごりした肌触り、ぞくぞくする極細の線は、やがて切迫した重音の繰り返しとなって内なるエネルギーを高める。寺嶋陸也のピアノも歯切れよく音群を投げかけていく。

「ソニトゥス　ヴィターリス」はラテン語で「生きとし生けるものたちがたてる音」の意味。第1番でのテンションの高さは、5曲通じて、いささかもとぎれることがない。ピアノが低く蠢いて始まる第2番で「歌」の断片が生まれ、息の長いフレーズで独白を繰り広げる無伴奏の第3番を経て、頂点となる第4番へ。形態といいテクスチュアといい、人間的な肌触りが色濃い、新実らしい曲だ。厭世感の漂う第5番に至って、自然、生命、人間、霊魂をめぐる一連のドラマが完結する。

ブルース、ワルツ、タンゴの枠組みを借りた「舞踏組曲」はさらに鮮烈。渡辺玲子と加藤知子による丁丁発止の二重奏は凄まじい求心力だ。瓦礫の山が網膜に焼きついたいま、微温的な前衛性には威力がない。だからこそ、スリリングで愉悦にみちたエンターテインメントは価値がある。震災への想いを託して「つぶてソング」を書き綴る新実の真骨頂を、このユーモアのある一連の舞曲に感じたのである。（白石美雪・音楽評論家）

集中力みなぎる演奏をきかせた渡辺玲子（左）と寺嶋陸也＝竹原伸治氏撮影

月曜＝音楽　火曜＝文芸／批評　水曜＝美術　木曜＝舞台　金曜＝映画　土曜＝ポップ